

No.458

2013年の年頭にあって

2013. 1. 29

2013年の年頭にあって —安房集会へのお誘いを兼ねて

三橋広夫（千葉県歴教協会長）

あけましておめでとうございます。

昨年は暮れに選挙があり、自民党の圧勝、維新の会の旗揚げ、安倍政権の成立など、右派勢力の伸張がはっきりと現れました。さっそく、文科省は、学力テストの全国的な実施と「心のノート」の復活を発表しています。さらに、高校生への学力テストの実施なども日程にのぼせようとしているようです。

それでも、「さようなら原発世界大集会」に見られるように、3・11以後の脱原発の動きは止まらず、国民的なコンセンサスになろうとしています。フクシマの事故を思い起こせば、そしていまだに10数万人にも及ぶ人々が避難生活を強いられている現実を思えば、原発を基幹エネルギーとして利用するという考えは捨てなければならないと多くの人々が思い始めていると言えるでしょう。

原発立地地域の人々が一步踏み出せないのは、その地域の経済や社会がいままでの歴史の中で、原発と深く結びつき、人びとの生活自体が原発の構造の中に組み込まれてしまっているため、一人ひとりの努力ではそこから抜け出せないのではないかと思込まれているからです。数十兆円というお金が原発をつくるために使われてきました。それに匹敵する資金を自然エネルギーの開発に使えば、もっとスピーディーに社会全体がシフトしていくことはまちがいありません。

さて、私たちにできるのは、教育の現場でそうしたことも含めて社会を見つめ、考えることであり、また地域のなかで本当にその地域の発展のためになるのはどういうことかをみんなで考えていくことです。

千葉県歴教協は、「子どもに根ざし、地域に根ざす教育実践」を提起してきました。この場合の教育実践とは、教室の中だけのものではありません。子どもたちも地域に暮らしています。地域探検もします。地域で大人たちが自分たちの地域をどのようにしたいのかを知りたがっています。さらに、地域の大人たちも子どもがどのように育っていくのか、育っていているのかに深い関心があります。ですから、「子どもに根ざし、地域に根ざす教育実践」は、子どもからも地域からも求められている実践とは何かを追求することだとも言えます。

今回の安房集会では、「文化遺産を活かした館山まるごと博物館」というテーマでシンポジウムが行われます。これは安房の地で地域づくりにかかわってきた4人（愛沢伸雄さん・島田吉廣さん・鄭一止さん・高野良裕さん）がそれぞれの考えをもちより、交差させることで、展望を切り開こうと意図しています。

一つ授業実践を紹介します。1987年にリゾート法が制定され、鳴り物入りで地域開発が提唱されました。そのとき館山市のH中学校では、子どもたちが「館山の開発はどうしたらいいか」を真剣に考え、聞き取り調査をしました。ところが、聞き取り先が役所や開発推進の人々に限定されていたため、子どもたちは「大手資本と組んで館山をリゾート地として開発していく」という結論を導き出しました。実践としてはここまででしたが、数年も経たないうちにその構想自体が立ち消えになりました。

この実践は、たとえ推進派の人々だけの聞き取りだったとしても、子どもたちが疑問を持たない活動には意味がないことを教えてくれます。そして、疑問が生まれたとすれば、当時の反対派の考えも聞きたくなるのが自然な流れです。教師にそうした発想がなく、行政の方針を伝えるだけの実践に留まっている、もしくはその枠組みから子どもたちを出さない（出せない）実践であったからこそ、現実を見ることができなかったともいえます。

今回の安房集会では、地域実践報告（池田恵美子さん）、シンポジウムともに安房の現実を見すえながら、地域に根を張った活動が紹介され、また私たちのこれからの活動に指針をあたえてくれると期待しています。

さらに、六つの分科会にはすでに30本以上のレポートがエントリーされ、時間配分などができなくなるほどでした。その1本1本に込められた思いを大切にしながら、参加者全員で学びあう集会にしたいと強く思います。

ぜひ、安房集会にふるってご参加ください。

千葉県歴教協の集大成が 1枚のDVD（2012年改訂版）になりました

このDVD（「わたしたちの歩み 2012年改訂版」）は、私たち千葉県歴教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言っても過言ではありません。千葉県歴教協の会員であっても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならぬと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり返り、財産となることを期待しています。

このDVDをご希望の方は事務局までご連絡ください。1枚千円です（郵送料含む）。（M）

■関東ブロック集会に参加して

「杉村楚人冠と大逆事件」の学習と新たな課題について

松戸支部・白鳥晃司

昨年の暮、12月22日と23日に行われた関東ブロック集会に参加してきました。私がこだわって追及している課題で、何を報告したのかを中心に書かせていただきます。

今回の開催地は、山梨県。会場は石和温泉「ホテル仙石」でした。テーマは、「地域と子どもに根ざす社会科教育の創造」です。記念講演は横浜国立大の大門正克氏で『『生存』を問いたす歴史学～3・11後に東北の近現代史を「考える～」』でした。

1日目と2日目の分科会は「小学校」「中学校」「高校」「平和」「地域」の5つでした。1日目の地域に学ぶつどいは、「山梨の戦争遺跡保存について」「山梨平和ミュージアムの5年間」と私が参加した「金子文子の生涯と朴烈事件」の3つでした。2日目の閉会集会とその後のフィールドワークは別な用事のために参加できませんでした。

参加者は70～80名というところだったと後から伺いました。一昨年の栃木、昨年の群馬と比べると少し参加者が増えたように思います。山梨県歴教協の会員の方々の努力が実ったと思います。ご苦労様です。

ですが、かつてのような150名を超える研究集会を体験しているものにとっては寂しい

感じがしました。千葉県の参加者も約10名だったと思います。約半数は安房のNPOの方々だったことや若い人の参加が少ないことを思いますと、これからの歴教協のあり方をどのようにしていったらいいのか、『はて?』と考えてしまいました。

私が参加した分科会は、「地域」です。参加者は17名でした。

つくる会系の中学校社会科教科書を採択している横浜市と東京・大田区での教科書をめぐる報告が2本ありました。それぞれ、運動を中心的に進められている方々から緊迫した状況が話されました。現場教師や生徒・保護者の願いからではなく、上からの政治的な圧力のもとで非民主的に採択されたことに対して、私たち千葉県も、次回の採択では今から、市民と一緒に学習会などを進めていく必要性を感じました。

3本は、地域の掘りおこしや見学に関するものです。1本は、東京の戦争遺跡についてです。今まで地道に掘りおこしてこられた遺跡についての報告です。パワーポイントを使つての分かりやすい報告です。歴史の現場に立つことの大切さがしっかりと伝わってきました。また1本、千葉の安房のNPO法人の「青木繁が海の幸を描いた漁村」に関するものです。地域おこしとの関係での報告はスケールの大きさを感じました。2月末の千葉県歴史教育研究集会の開会集会のシンポジウムや現地見学で詳しく学ぶことができると思いました。

後1本は、私の報告です。ここ数年、私は、松戸市にある「都立八柱霊園」に眠る、「明治」～「昭和」期に活躍した杉村楚人冠（本名：廣太郎、和歌山出身）が記者として発信したもののなかに、現代にも当てはまるものがあるのではないかと「感銘」を受け、彼の足跡を追究（求）してきました。我孫子の旧楚人冠邸（現「我孫子市杉村楚人冠記念館」）に保存される資料から自分なりに「分かった事実」と、それを学校教育の近現代史学習にどう活かせることが出来るのか、その可能性はあるのかをテーマにして、その都度、全国大会で報告してきました。前々回の名古屋市（2010年）、前回の北九州市（2011年）で開催された全国大会に引き続き、昨年（2012年）の千葉大会でも、提案発表しました。

私が暮らす地域（＝松戸市六実）は、「昭和」初期（＝戦前）ゴルフ場でした。ここにやって来た楚人冠は、夏目漱石・石川啄木・南方熊楠ら文化人や環境学者などとの親交を深めた人物でもあります。

彼は、日露戦争で一家の中心となる働き手が徴兵され、農耕馬も徴用され、荒廃した東北地方が1905～06年の冷害で飢饉に陥った悲惨な状況～「欠食児童」「女子の身売り」の増加などの事実～を、廃刊に追い込まれる『週刊平民新聞』の非戦論に呼応するかのよう書き綴っています。それだけではありませんでした。楚人冠は、ロンドンタイムスで発表されたロシアの文豪トルストイ論文「日露戦争論」を翻訳しています。幸徳秋水と堺利彦が『平民新聞』で訳すよりいち早くそれを『東京朝日新聞』で発表するなど英語堪能でもあります。

最近、彼の訳したものが、与謝野晶子の歌『君死にたまふ(う)ことなかれ』（1904年発表）に影響を与えたという研究が発表されています。晶子の歌はトルストイへの返歌ではないかというものです。ここで、私の心の中に、そのトルストイ論文翻訳記事と東北の惨状を綴った「雪の凶作地」との共通性があるのではないかという研究課題が大きく浮かび上がりました。

トルストイは、農民が果てしなく遠い東方の「満州」に送られて進められるロシアの皇帝の戦争を煽る役目としての新聞記者を批判しています。楚人冠は、それに対して東北地方の多くの農民が「満州」に徴兵されたがために荒廃した事実を綴りました。彼は、この仕事をする中で、どんな記者にならなくてはならないのかを学んだのではないかと考えています。旅順をめぐる戦いで戦死した農民の遺児についても、その行く末を心配してい

ます。幸徳や堺と親友だったことも影響していると思いますが、楚人冠の人道主義（＝フューマニズム）は、トルストイの思想からの影響もあるのでしょうか、また与謝野晶子と楚人冠は、個人的にも交流があったのかを、検証したいと考えています。

昨年末から今年にかけて、「楚人冠記念館」で公開された啄木直筆の楚人冠宛の書簡には、幸徳らが冤罪で裁かれる「大逆事件」を気に掛ける溢れる気持ちが綴られています。話題になっています。啄木の没後100年にふさわしい企画ですが、ここでは、堺利彦からの書簡も一枚が展示されました。これについては、これまでの報告でも触れたものの一つです。その他の何枚かの堺からの書簡はいつ発信したものかはっきりしないものも多いのですが、「大逆事件」前だけでなく、その後の楚人冠と堺利彦との関係がどのようなものなのか調べようとしていたところ、法政大学「大原社会問題研究所（大原社研）」に、堺や幸徳秋水との親密な関係も明らかになる資料があることに気がつき、何回か出かけてみました。

「大原社研」に残る資料に、楚人冠が堺の要請に応じて、募金をしたことを証明できるものがありました。楚人冠旧邸宅に残る書簡類（手紙・ハガキ・電文など）は1929年の東京市議会議員選挙と1930年の衆議院議員選挙に立候補した堺利彦が支援要請をしたものであることが「判明」したのです。楚人冠に贈られていた赤紙に書かれた揮毫（＝掛軸）は、堺が衆議院議員選挙の資金を得るためのものであったこと、その他に多くの揮毫が銀座で売りに出されたこと、それらが大風呂敷を担いだ元九州帝大向坂逸郎や元東京帝大の大森義太郎が「売子」となって売りに出されていたことなどが当時の新聞記事で確かめられました。楚人冠は、50円を「カンパ」していたのです。会計簿、選挙の内部資料、そして当時の新聞記事でそれが確かに証明されました。楚人冠邸と「大原社研」が結びつきました。

また、興味深い原資料も「大原社研」の職員の方からご教示いただきました。あの与謝野晶子が堺の立候補推薦を許諾する直筆の返信ハガキと堺を讃える歌三首の書面も存在していました。彼女は10円募金していたこと、そして堺の「マニフェスト」に推薦人の一人として名前が記されていることも分りました。

与謝野晶子のことについて一言、付け加えて述べておきたいことがあります。

中学校の多くの歴史教科書は、「日露戦争」の学習単元で、「歌人の立場で主戦論に疑問を投げかけ、日露戦争に出兵した弟を思って『君死にたまふ(う)ことなかれ』という詩を発表し」（東京書籍版）た与謝野晶子の歌の一部を紹介しています。ところが、つくる会系の育鵬社版教科書は、「日露戦争」の学習単元で扱わずに、「太平洋戦争」の学習の後のコラムページで、与謝野晶子を「奔放に恋をよんだ情熱の歌人」として、

日露戦争の際には、出征した弟の無事を願う詩『君死にたまふことなかれ』を発表し、話題となりました。／しかし、太平洋戦争（大東亜戦争）の際には、／水軍の 大尉となりて わが四郎／み軍いくさ軍にゆく たけく戦へ／と、海軍大尉として出征する四男を励ます歌も残しました。

と記述し、歌の中身は紹介していません。そして、与謝野晶子を「11人の子の母親として、家族を愛し、家を重んじたその姿勢は、当時盛んだった女性解放運動とは一線を画するものでした。」とします。しかし、私は、楚人冠と堺との関係を調べるなかで、与謝野は、女性解放運動についても発言し、「大逆事件」後の社会運動のリーダ格・堺利彦を支援するなど社会運動に積極的に関わっていたことがはっきりしました。育鵬社版教科書の記述の誤りを証明するものです。ちなみに、自由社版教科書は、この詩については一切触れていません。

「大原社研」では、更に、「大逆事件」で犠牲（死刑）になった岡山出身の森近運平が編集した『大阪平民新聞』の「片腕」となった武田九平（無期懲役に減刑）への幸徳秋水の揮毫が、堺を介して存在していたことも教えていただきました。

歴史の真実を知る醍醐味を感じる日々が続きますが、これらの事実をこれから主権者として生きていく若者にどう示していくのか課題です。昨年の千葉大会から今年の大阪大会に向けていくつかそれを整理して提案してみたいと考えました。

- ① トルストイ論文が与謝野晶子に「返歌」としての『君死にたまふ(う)ことなかれ』を生んだとすれば、それを翻訳した楚人冠の記事とその裏にある思想とを授業の中でどう扱ったらいいのでしょうか。また平民社の運動との接点のなかで、『君死にたまふ(う)ことなかれ』も扱えるのではないかと考えました。与謝野は、大阪・堺の出身です。彼女を研究する大阪・関西のグループが発信するものを学びたいと思います。
- ② 堺利彦が発信した楚人冠宛書簡と贈られた揮毫と同じように発信された揮毫等が他にあるのでしょうか（関西も含めて）。それらを調べるなかで、「大正デモクラシー」～「満州事変」に至る時代の庶民の願はどんなものであったのかを調べてみたいと思います。よく、当時と3・11以降の今日の状況が似ているといわれますが、彼等が選挙運動で訴えたものなどから調べてみたいと考えます。
- ③ 「大逆事件」連座の武田九平への幸徳からの揮毫が「大原社研」（当時は、大阪に会った）に存在していました。その原資料がどのような経緯で渡ったのかが、楚人冠と親友の堺との関係で分かりましたが、「大阪平民社」とそこに集った人々が非戦と格差貧困克服のために弾圧にどう抗していったのか学習し、大阪大会では、その運動の「跡地」に立ってみたいと思います。また、会場となる関西大学は古くからの大阪・関西の社会運動や労働運動研究のメッカです。先行研究に学びたいと思います。

今年の大阪大会で、関西・西日本の方々にも教えていただくことも視野に入れて、更なる研究をして、2月の安房での研究集会に臨みたいと思います。

■中間研究集会に参加して

長屋勝彦（東葛支部）

1月13日、東京のラパスホールを会場に第31回中間研究集会が行われた。今年の参加者は58名、北海道や島根からの参加者もあった。今回のテーマは「領土問題をどうとらえどう教えるか」である。（福島県歴教協佐藤誠さんによる特別報告「原発事故から1年10か月目のフクシマの人々」については省略）

報告① 歴史学から見た領土問題 歴教協委員長 山田 朗

竹島と尖閣の問題を中心に、歴史的な経緯の考察から報告された。今日の領土問題は戦争と連動している。盛んに言われている「固有の領土」論は成り立たない。尖閣も竹島のどちらの国家の人も住んでいない。

日本は日本近海海図を1917年に作成している。それ以前はイギリスの海図（日清）、日露戦争に使用）を使用している。それを元に1884年に探検、1885年には編入準備をしている。そして1895年1月14日、尖閣の領有を閣議決定した。まさに日清戦争中である。戦後、中国（台湾も）は尖閣領有の発表をしている。地下資源の発見がその理由とされたいが、それだけでなく沖縄返還もその背景にあると考えられる。沖縄が日本に復帰する前に時期を合わせて領収を主張している。

昨年は尖閣の所有の問題で揺れ動いた。尖閣は個人所有で、所有者が変わっているため問題はこじれた。東京都の購入はたいへんおかしい。都が他県を買い取って範囲を増やすことはできない。政府による尖閣の購入費用は20億5000万円である。その根拠は、一から島を作った場合

のコストから算出したというおかしな理由付けである。

1901年に大韓帝国が「竹島」を編入している。ただしその島が現在の独島かは定かでない。日本では、1904年中井養三郎が「りゃんこ島」を日本の領土への編入を申請している。それを受けて1905年1月28日、無人島を「竹島」と名付けて領有を閣議決定した。これも韓国を戦場とした日露戦争中である。そしてこれは韓国併合の前段階と見ることもできる。

国際法からすると、1951年のサンフランシスコ講和条約二条a項で日本は竹島を放棄したととれる。しかし戦争の後始末のサンフランシスコ条約の締結には、領土問題の当事者のソ連(ロシア)、中国、韓国は呼ばれていない。朝鮮戦争の最中だった。アメリカの都合で開催された会議が、今日の領土問題を引き起こす一端となっている。未着手・未完の戦争の後始末である。

侵略戦争や戦争犯罪を日本が隠したり、忘れたりしようとする歩み寄りはない。領土問題を利用した軍拡、領土確定は困難である。領土確定のみを結論にせず柔軟に発想することも大切である。「固有の領土」と断言するのは政治的発言である。歴史的に証明しきれない領土もある。

北方領土は1875年から「日本人」が住むようになった。日本人が住んだのは70年、戦後ロシア人も70年近く住んでいる。国境のない場所、曖昧な場所、空白な場所が日ロ国境である。固有の領土というまやかし、ごまかしのあげく北方領土は両国間で解決しても住民にとって解決ではない。過去の領土の移動で、住民は一方的に追いやられている。またアイヌの権利、存在は無視されてきた。

「固有の領土」という政治的発言、行動により、新たな問題が生まれた。かつては竹島は日韓漁業協定で両国が漁業できた。国境問題にしてからややこしくなった。八重山の漁民は尖閣に避難漁港を求めているが難しくなった。国家・国境に対する先入観は大人にもある。「先占の理」を取り決めた国際法については、欧米の都合で作られたモノで、人類史のわずかに100年にすぎない。そもそもこの国際法がどういう問題を持っているのかも歴史的に検証することも重要である。

以上が報告の概要であるが、資料一覧を使いながらの報告は、短時間の中でもいつもながら完結明瞭な報告だった。会誌に報告概要が掲載されるだろうが、中学・高校で十分活用できる内容なので、「歴史学から歴史教育へ」という歴教協の合言葉のごとく教材化するとよい。

報告② 竹島・尖閣問題と教科書を授業づくり 歴教協常任委員 桜井千恵美

まず、中学校の教科書に於ける領土問題の記述について触れられた。地理、公民ともに2012年の教科書記述は、韓国・中国の不法性を書くようになった。しかし歴史的事実は説明不足である。次に歴教協会員の授業実践が紹介されたが、会誌2月号に掲載されたので各支部で議論していただくとよい。

桜井さんの授業実践は、受験期の慌ただしい中での実践であること、指導要領の制約があることを乗り越えて取り組まれた。単に日本の主張だけではなく、韓国・中国の主張の理解をねらいとした。1時間目は、歴史的な視点から、戦争と編入の年の関係に目を向け、当事国が追い込まれている状況の下で領有を宣言していること、「日本固有の領土」という主張への疑問点を投げかけている。2時間目は、2012年の領土問題の動きを中心としている。韓国・中国は「歴史問題」と捉えていることの背景を探り、尖閣国有化の流れを確認し、日韓歴史問題の大きな課題である慰安婦問題との関連性にも踏み込んだ。

子どもたちの感想は、韓国については話し合いにならない点から韓国への批判がある一方、歴史の重みを認識した意見もあり、韓国との友好関係の構築を望む声がある。中国に対しては、深い話し合いを期待する意見が多い。また、両国の大人げない対応に批判が出ている。子どもたちの意見にはほとんど見られなかったが、「どうする」という自分なりの解決に向けての多様な意見が引き出せると、新聞への投書など、より発展的な行動につながられたのではないだろうか。

報告の後、3つに分かれて「領土問題をどうとらえどう教えるか」のテーマで意見交換を行った。実際に授業を行ってみて感じたことを交流したり、今後予想される領土問題を利用した軍拡などの動きなどを述べ合うことができた。

領土問題を利用したナショナリズム高揚がもくろまれる中、山田報告、桜井実践を受けて、自分なりに、子どもたちに、冷静に客観的に事実を教材に領土問題を考えさせたが、逆境も予想されるが、各地で勇気を持ってこの問題に取り組んでいかねばならないと感じた。

■書評『新しい歴史教育のパラダイムを拓く』

千葉県立成田国際高校 秋山真一

「加藤の日本史」は追試者の累々たる屍の上に屹立する諸実践の束である。「加藤の討論授業」と呼ばれるその存在を知ったとき、多くの者がそれを「お手本」にして実践を試みたであろう。日本史の教員となった者で、生徒が目を輝かせて授業に参加し、自分の意見をぶつけ合う、そんな生き生きとした教室を思い描けなかった者はいないはずだからである。しかし、惨憺たる結果に終わっている場合が多いようである。その果てにささやかれるのが「加藤の日本史」は加藤公明という「職人」によってなされる技であるとの言説である。本書は、その「職人」ぶりに圧倒されつつも「職人」技に終わらせず、万人にその方法を開いていこうとする試みである。

そういった意味からすると、第5部から読み始めるのも一つの手かも知れない。特に「加藤の日本史」の未体験者にはそれがよいように思われる。本書は5部からなるが、第V部は「加藤実践の現在」と題して徳政一揆に関する実践報告とそれに対する「次世代」教員のコメントから成り立っているからである。ある者は、その授業の展開に圧倒されつつも、加藤の生徒に寄り添う姿に注目をしている。「生徒が安心して堂々と発表できているのは、加藤のカウンセリングマインドではないかと感じ」ているのである(17章1節)。そこから最初から緻密な討論を展開させ、収斂させていくことは難しくても、生徒の意見を真摯に受け止めることはできるとして、そこからなら自分は始めていけるとの確信を持つようになっていく。また、ある者はそこにありべき民主主義の光景を見出し、自分なりの実現への決意を表明している(17章3節)。このような「ファーストインパクト」への受けとめ方を読むことを通して、「加藤の日本史」の魅力が反射的に浮かびかってくる。

しかし、本書で最も迫力のあるのは第Ⅲ部「教育実践の現場と加藤実践」であろう。ここでは、「加藤の日本史」に魅せられ、その困難性を重々承知の上で「加藤の日本史」と向き合い、自分の授業を構築していった姿が綴られているからである。個々の教員は様々な教育環境に身を置いている。それは、中学校であったり、教育困難校であったり、あるいは他県であったりする。もし、「加藤の日本史」が普遍性を有しているならば、いかなる局面であっても実践が可能であるはずである。その結果、例えば榎澤氏は、「加藤実践を「進学校」「教育困難校」という枠組みで考えることに意味がないことがわかる。(中略)それぞれの目の前にいる生徒たちが、周りの生徒の力を借りながら一步一步、歩み続けていくことで、自らの歴史認識を深めていくことが可能だと論じて教育困難校での有効性を主張している(11章)。さらに、これらの実践報告で興味深いのはそれぞれの実践者が加藤実践をふまえて、オリジナルの授業を構築していることである。そういった意味で加藤実践は、習字におけるお手本の様なものではなく、種のようなものであることができるであろう。実践する者の歴史的関心や目の前の生徒の様子に応じて無限の発現をしていくための契機となるのが加藤実践なのだとわかってくる。

ところで、このような魅惑の「加藤の授業」はどのように生成してきたものなのか。苦労した姿が見えないとの評のある「加藤の日本史」の成り立ちをかいま見ることができるのも本書の魅力の一つである。アプローチは二つの面からなされている第Ⅰ部では教育史的観点から生成ぶりを論じられているし、第Ⅳではご自身の言葉とインタビューが掲載されている。その結果、加藤先生自身が、時代、学校、生徒と向き合いながら授業を作り上げてきた過程がおぼろげながら見えてくる。

特に歴史部会での活動や宮原氏の著書を読んでインスピレーションを得た箇所などは、今現在、自分の授業作りで悩んでいる者たちにも勇気を与えるのではないであろうか。誰もが悩みつつ試行錯誤の中から自分のスタイルを作り出していくという当たり前であるが重要なメッセージを受け取ることができるからである。

さて、このように様々な角度から述べられている諸論考を通じて、浮かび上がってくる加藤先生らしさとはなんであろうか。それは、加藤先生が常に瑞々しいということである。例えば、生徒の質問に驚く姿が指摘されている。それは教師にとって想定外の質問であり、教材への準備を飛び越えた質問に他ならない。そうした状況に直面したとき、多くの教師は進捗との関係もあり、お茶を濁して通り過ぎてしまうであろう。しかし、加藤先生はそれをまっすぐに受け止め、一緒に考え始めていくのである。その積み重ねが「加藤の日本史」を生み出してきたのである。

そうした観点から読んでいったとき、一つの懸念が頭をかすめたことがあった。それは、多くの分析的知が加えられる事で、逆に「加藤の教室」の雰囲気伝わりにくくなっているのではないかということである。諸論稿を読み進めていったとき、ややもすると生徒の様子が一つのテーマに向かってきまじめに考え、討論を交わしているといった像に収斂しがちであるように思われた。しかし、実際の「加藤の教室」は底抜けに明るく、常に笑いに満ちあふれている。加藤先生の授業を「討論授業」というがそれも誤解を招く要因ではないかと思うくらいである。荒沢氏は卒業生へのインタビューで次のような言葉を引き出している(15章)。

グループディスカッションとか、そういう選考の過程とかで、人の意見を聞きつつ一つの案をまとめていかなくっちゃいけないときに、なんか、私だったら、「あつ、その案いいね」っていう風に結構言ってたと思うんですけど(後略)

就職活動でのディスカッションに違和感を覚えての発言である。加藤先生にとっての討論は「朝生[※朝から生テレビ]」的に相手を撃破し、やりこめるためのものではなく、お互いの意見を聞きつつ高めあっていくための装置に他ならない。お互いに他者を認めあうことを出発点としており、「討論」というより「対話」と言った方が良いようなものである。そして、そのような「対話」が活発に行われる場として「笑い」のある教室が前提としてある。論者達は、その理由としていくつかあげているが、隣で数年間、授業を行っていた者としては無条件に楽しくて「笑い」に満ちあふれていることを感じていた。そのような教室がなぜ実現できるのか。まだ、「加藤の日本史」には謎がたくさん満ちあふれている。そういったまだ解き明かされていない謎をめぐって、新しい考察が加えられていくことであろう。本書はその第一歩となるはずである。

ところで、そのためには正確な「加藤の日本史」の把握が重要である。第Ⅱ部では、教育学的な観点から論じられているが、「加藤の日本史」に対して誤解からの批判もあることが指摘されている。報告だけではわからなく、実際に見てようやくわかったとの指摘(10章)もあり、映像や実際の授業を見学した上での考察がより重要になってくるであろう(本書にはしっかり映像資料もついている)。また、より生産的な議論を立てていくのも重要である。生徒が立てる自説について、学説のように優れた説を立てさせるが第一義か、自分の生活の中からにじみ出た説を立てさせるのが第一義かといった思考がめぐらされている場面も見受けられたが、それはコインの両面のようなものであると加藤先生は捉えているのではないだろうか。なぜ、学説にもたどり着くような優れた説が立てられるのか、なぜ自分の生と重ね合わせた歴史の考察ができるようになるのか。両者を分けてそれぞれを考察していった方が生産的であるように思われた。本書は和田悠氏によるはしがきにもあるように「加藤の日本史」の「共有化」を目的として編まれている。年を追う毎に「雑用」の多くなる校務の中でそれでも生き生きとした授業を構築していきたいと考える教員にとって「加藤の日本史」は、一つの確かな道標であり続けている。来し方を再考したいと考えている者にとっても、新しい一歩を踏み出そうとしている者にとっても、本書は多くの考えるための素材を与えてくれるであろう。

■書評 田中正敬・専修大学関東大震災史研究会編

『地域に学ぶ関東大震災―千葉県における朝鮮人虐殺 その解明・追悼はいかになされたか』 日本経済評論社、2012

三橋広夫(千葉支部)

本書は、表題にあるように関東大震災時の朝鮮人虐殺の事実を掘りおこし、地域の人々とともに追悼してきた千葉県実行委員会の掘りおこしの記録である。つまり、虐殺の事実そのものではなく、そうした歴史をどのように「歴史」として浮かび上がらせつつ、特に地域の人々の歴史意識の変化をも「歴史」としていった作業の記録である。

本書の構成は、以下の通りである。

語られない「現実」―関東大震災下の朝鮮人虐殺事件の概要と本書の目的

第一部 調査者とともにたどる関東大震災朝鮮人虐殺事件の地域

第1章 船橋市営馬込霊園・「船橋無線塔記念碑」を歩く

第2章 八千代市高津・大和田新田・萱田を歩く

第3章 「軍郷」習志野を歩く

補記 第一部の理解を深めるために

第二部 千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会のあゆみ

第4章 関東大震災朝鮮人虐殺研究の二つの流れについて

―アカデミックなアプローチと運動的アプローチ

第5章 千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会の活動Ⅰ

―『いわれなく殺された人びと』(一九八三年)刊行まで

第6章 千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会の活動Ⅱ

―遺骨の発掘と慰霊碑建立

第三部 聞き書き記録

第7章 実行委員会への聞き書き

第8章 船橋における慰霊碑建立と追悼式について

私は、特に第二部、第三部に注目した。それは、千葉県歴教協の活動の根幹の一つである「地域に根ざす」と関係が深いからだ。

本書では、「千葉県における地域史への取り組みから始まった朝鮮人虐殺の調査研究が、地域の市民の協力で歴史教育の問題として朝鮮人虐殺を取り上げたのみならず、これまで知られていなかった事実まで発掘することになった。千葉県実行委員会によって、震災当時、習志野の朝鮮人収容所周辺でおきた『もう一つの虐殺』が明らかにされ」(p.128)たと千葉県実行委員会の活動を評価している。

さらに、「地域住民の複雑な感情」ゆえに掘りおこした事実を公開できないこともあったが、「実行委員会の調査・追悼活動は他方において、地域住民の意識を変えていったと思われる」(p.148)、そうした意識の変化のなかで、『いわれなく殺された人びと』が出版できたとしている。

その後、遺骨の発掘、慰霊碑の建立へと向かうわけだが、ここで碑文をどうするかが問題となった。実行委員会と地域住民の認識の差が現れたのである。結局、碑には「関東大震災朝鮮人犠牲者の碑」とだけ刻まれたのだが、そのことを「『それ(加害責任は書けないこと―引用者)はわかるのだが、やったことにはちがいない』と地域の責任を強く感じる言葉が出てきた」(pp.179～180)という平形さんの言葉を引いて、そうした地域住民の意識の変化を大切にすることを強調している。

そして、毎年、慰霊祭後のフィールドワークの重要性を記している。「フィールドワークでは、実

行委員会がこれまでの活動を通して見てきた、地域における、現在につながる虐殺の問題についてしばしばふれる(何度聞いても新しい発見がある!)。文字で書かれた歴史と、口で語られる歴史との間には差異があり、後者の歴史には解決されない問題が含まれている。そのような歴史には、虐殺をとらえ返すヒントが隠されていて、それを知るためには、またあらためて話を聞くしか手段がないのである。」(p.187)

課題を一つ。高津観音寺にある「普化鐘樓」建立文にある「現代の韓国人はその暗い歴史を憎みはしても、今日の日本や日本人を咎めたくはない。むしろ歴史を正視し、その歴史の前に謙虚な日本の友人にありがたいとさえ思う」(p.44)という一節は、韓国民民主主義の一端を示すものだが、いったいそれはどのような過程を経て形成されたものか明らかにする必要があるだろう。おそらく沈雨晟(シム・ウソン)の活動と無縁ではないはずだ。

最後に、「年表」は貴重だ。これを見れば一目で活動の経過がわかるほどである。

こうした「中間まとめ」をしてくれた本書に感謝するとともに、これをもとに歴史教育としてどのように発展させられるかが、千葉県歴教協の課題となることは間違いがないであろう。

■書評

千葉県歴教協世界部会編『地図を書いて学ぶ世界史』その3

米山宏史(歴教協常任委員)

12「スコッチ・アイリッシュがもたらしたもの」はスコットランド系住民のアイランド、北米への移民の足跡をたどり、さらにその後のアメリカ合衆国の建国・発展に彼らが果たした役割を照射している。日本ではイギリスという一元的な名称でよばれる国家が実はイングランド以外にスコットランドやウェールズを含む多元性を帯びていることにあらためて気づかされ、名誉革命がアイランドでは流血をともなった戦いであり、アイランドまで視野に入れて名誉革命を理解すべきこと、北米に移民したスコッチ・アイリッシュがイングランドへの対抗意識を持ちアメリカ独立革命で大きな役割を果たしたこと、その後、スコッチ・アイリッシュから多くの政治家、文化人が現れたことなど、1つの民族の「移動とその後」を追跡することによって、その民族のアイデンティティ、ナショナリティを知ることができ、さらにイギリス史やアメリカ史の深層・多層を理解することができる。近年、移民史研究が隆盛であるが、こうした視点から日本人のハワイ、北米・南米移民も授業で取り上げてみたい。

13「革命は海を越えて」が取り上げるハイチ革命は黒人奴隷貿易の「その後」を生徒に考えさせ、また、「敗北史観」を克服するための最適なテーマである。同時にハイチ革命は大西洋を越えたフランス領植民地サン・ドマングの黒人奴隷たちがフランス「人権宣言」の普遍性を問いただしたこと、ハイチ革命とフランス革命は相互に影響を与え合った環大西洋革命であったこと、フランス革命後政権を握ったナポレオンが最初に敗北した対象がハイチの民衆ゲリラであったこと、ハイチ革命は黒人奴隷の解放とハイチの独立という長期の2段階革命であったことなど、生徒と学び合いたい多くの事実がある。一般的な授業では、ハイチの独立で終わり、「その後」のハイチを扱わないため、現在のハイチの貧困の理由を生徒は理解できない。しかし、本13では、独立後のハイチがフランスから法外な賠償金を課され払い続けたこと、その後のラテンアメリカ諸国の独立過程でハイチが徹底的に孤立化を図られたこと、土地分配の不徹底とモノカルチャー経済の温存など、その後のハイチが困難な国家建設の過程をたどったことに論究し、ハイチの「偉大な独立」とその後の「負の歩み」の連関が明記されている点に注目したい。

14「クックの航海」は18世紀後半の植民地争奪戦争期に太平洋の島々の領有を目的に行われたクックの3回の航海をテーマに、航海中におきた諸事実を語りながら、現代の私たちが学ぶべき多くの真実を紹介し、極めて示唆的である。それは一言で言えば、私たちの人間性・良心をめぐる問いかけである。クックの航海が地理学・天文学・博物学などの学者が同行した「科学的探

検航海」であったこと、航海によって得られた「発見」の事実にもとづく領有権の主張が航海記録や地図の作成など科学的情報を形成し、ヨーロッパ勢力による世界の従属化を加速させたこと、クックら航海者と島民の関係は「発見者」と「被発見者」という単純な対立的関係ではなく、航海者の中にはタヒチ島民の個性を尊重し彼らの肖像画を個性豊かに描いた風景画家ホッジや、クックが行わせた人肉食の実験を忌避したタヒチの少年マヘイネに「心情の高貴さ」を認めたゲオルゲ・フォルスターらが存在したことなどを論じている。ハワイの先住民社会に対する無理解と傲慢さから殺害されたクックに対して、自らの探検航海を侵略行為をみなし、先住民の文明を認め、ヨーロッパによる先住民社会に対する「文明化」を否定するゲオルゲの認識は、帝国主義の世界分割を正当化する「文明化の恩恵論」や植民地支配を肯定する「植民地近代化論」を乗り越え、それを批判的に相対化する視座を提供している。

15「アイルランドを知ろう」はローマ帝国の領土とならずにケルト文化圏に属したアイルランドの文化的固有性、12世紀以来のイギリスの侵略と支配下での数々の惨劇と20世紀にまで及ぶ長く困難な独立闘争、大飢饉がもたらした飢えとの闘い、彼らの移民とその子孫の活躍（ケネディ大統領、ビートルズら）などアイルランドの苦難の歴史を紹介しながら、アイルランドに温かいまなざしを向け、私たちのアイルランドへの関心を誘っている。北アイルランド問題をめぐる1998年の「聖金曜日協定」、2010年の南北アイルランド評議会、市民の手による平和活動の展開は世界各地の宗教・宗派対立、民族対立を解決するための指針となろう。また、世界各地に暮らすアイルランド系の人々が自分たちの文化・歴史に愛着を持ち続けているという指摘は、ナショナリズム・愛国心とは何かを考えるうえで参考になる。

16『世界の工場』イギリスの誕生とは？はイギリスの七年戦争の勝利から技術革新と工業化（産業革命）、「世界の工場」への転化、イギリスと世界の諸地域との相互関係を構造的に追究し、授業づくりの視点を提示している。七年戦争の帰結としての1763年のパリ条約が英仏両国の命運をわかし、勝者のイギリスは北米植民地を一円化し近代世界システムにおけるヘゲモニー国家の地位を確立した一方で、敗者のフランスは産業革命の先陣を切るための前提としての市場・原料供給地を喪失したこと、やがて「世界の工場」と化したイギリスが、資本・機械・技術の提供などによって世界各地の産業革命を先導したこと、艦船と商船を併用して世界各国に通商を強制したこと、1840年から1870年にかけて貿易総額を5倍に伸ばし20億ポンドを以上を蓄積したこと、19世紀前半にラテンアメリカ、東インド地域との貿易関係を深め、さらに両地域に対する投資を活発に行ったことなどを論理的に説明し、近代世界経済におけるイギリスの地位と役割を理解するための有効な視座を提示している。

17「汽走軍艦に乗って来たペリー」は「蒸気船の世紀」とよばれる19世紀に蒸気船が帆船と競合しながら帆船を駆逐し、海上航路の主役の地位を占めていく過程を具体的な事例を通じて生き生きと描いていて興味深い。ペリーが対日開国要求にともなう「脅しの道具」として蒸気船で来航する必要があったこと、しかし、蒸気船による来航には石炭の補給が不可欠であり、そのため、ペリーは貯炭場を確保する必要性から太平洋の横断ではなく南アメリカ南端、ケープタウン、セイロン島、香港経由という遠回りのルートで来航したという事実は授業の中で生徒への有効な問いかけになる。帆船も蒸気船もそれぞれ長所と短所を持ちながら、資本主義時代には海運業者に積み荷の定時性・迅速さが求められたため蒸気船のニーズが高まり、実際に大西洋横断の航海日数で蒸気船が優位に立ったこと、誤算によって建造された巨船グレート・イースタン号の不運、スエズ運河の開通によって中国茶輸送の舞台から立ち去った帆船のティー・クリッパーのカティールサークの悲哀など、帆船から蒸気船への移行という、時代の転換にともなう船舶の種類の交代の歴史を温かい視線で活写している。

「地球世界の到来」の諸テーマについて

18「敵の敵は味方、友達の友達はみな友達！」は生徒にとって理解が困難な帝国主義時代の複雑な国際関係を「5秒で書ける世界地図」を駆使して立体的にわかりやすく教える授業プランを提示している。ビスマルク外交、イギリスの3C政策、英仏のアフリカ進出、中国分割など、第一

次世界大戦に至る錯綜した帝国主義列強の同盟関係・国際関係を世界地図の中に位置づけ、概念図を板書することによって、生徒は個々の同盟の目的、各国の対外政策や軍事進出の意図をより具体的に理解できる。世界地図を用いることによって、たとえば、義和団事件の鎮圧に日露両国が主力になった理由、バルチック艦隊がスエズ運河を通れず喜望峰周りの航路を利用した理由、ポーツマス条約以後、ロシアが再度バルカン半島に進出した理由などを生徒は丸暗記ではなく、地図の上で論理的に理解できる。扱われている個々の同盟関係をめぐる国家間関係の説明が簡潔・明確でわかりやすい。また、英仏協商後の英露関係、日露戦争中の英仏関係などの矛盾への言及は、帝国主義時代の外交と同盟が常に整合的であった訳ではないことを示唆し興味深い。江口朴郎の指摘のように、帝国主義列強は、国益をかけ「分割」対象をめぐって「相対立」する側面と共通の敵対勢力を前にして「相協力・同盟」という2つの側面があったことを本授業プランからも看取できた。

19「資本輸出・世界分割と立ち上がる人々」は1873年のウィーン証券取引所の破綻に起因する1873年大恐慌を帝国主義成立の起点と捉え、20世紀初頭までを視野に入れ、帝国主義の授業づくりのポイントとして、大恐慌への対応としての列強の市場競争、イギリスに世界の覇権国としての地位を可能にした貿易外収支と資本輸出、アフリカ分割の原則（先占権）を決めたベルリン西アフリカ会議に着目し、さらに「世界分割」の進行に対抗してアフリカとアジアの各地で発生した反帝国主義運動を概観している。帝国主義の理解には「まとめ」で指摘されている2つの点が重要である。一つは、列強が共同地を無主の土地とみなし「先占権」を「分割」の論理としたように、「分割」が近代ヨーロッパの国民国家の概念・価値尺度で強行されたこと、もう一つは「分割」と植民地支配が逆に当該地域の住民に民族意識を覚醒させ、それが自立的な民族の形成を促したという歴史の事実である。

20「アメリカはこの先に…！」は千葉県南房総のあわびダイバーたちの渡米とカリフォルニア州でのあわび生産の歴史を素材に、地域から世界史を捉える有効性と20世紀初頭のアメリカ社会における移民の状況について論じている。「地域から世界史を捉える」という方法は歴教協が一貫して追求してきたテーマであり、ここでもその有効性と必要性を確認できる。奈良時代の722年にすでに安房国産のあわびが税として平城京に送られていたこと、1899年に起業家の野田音三郎がカリフォルニア州モンレーの海に多くのあわびが生息していること知り、縁あって南房総の小谷仲治郎らが渡米し、千葉県沖の暖流黒潮とは異なる海水温15度という厳しい寒流の中であわび生産に励んだこと、当時のアメリカではヨーロッパ系、アジア系の様々な移民が混在する中で1882年に中国人排斥法が制定され、のちに日露戦争期には黄禍論が浮上し、排日運動が高まる困難な環境の中であわび生産を続け、アメリカ人家庭にあわびステーキが普及していったこと、太平洋戦争の開戦にともなう日系人の強制退去によって日本人によるあわび事業が終焉を迎えたことなどを知ることができた。この教材は、「地域から世界史を捉える」こと、20世紀初頭のアメリカの移民社会を理解すること、あわびという「モノ教材」「食材」から世界史を学ぶこと、海に生業を持つ人々の暮らしと労働を知ることなど多くの学習要素を含んだ魅力的な題材である。

■■ 建国記念の日 集会のお知らせ ■■

松戸集会 小沢隆一さん「平和憲法の歴史的岐路とわたしたちの課題」

2月11日(月) 9時40分開場 10時開会 松戸市民会館301号室

香取集会 金子勝さん「日本国憲法の危機—『戦争する日本』図票を阻止するために—」

2月10日(日) 13時30分受付 14時開会 佐原中央公民館

船橋集会 大野一夫さん「自民党の改憲案をめぐって」

2月10日(日) 13時30分開会

船橋市海神公民館